

子宮頸癌における骨盤/傍大動脈リンパ節転移の予後評価；FIGO2018の影響

The prognostic value of the presence of pelvic and/or para-aortic lymph node metastases in cervical cancer patients : the influence of the new FIGO classification (stage III C).

van Kol KGG et al
Gynecol Oncol 171:9-14, 2023

はじめに FIGO 2018 の大きな変更点の 1 つは、ⅢC 期が追加されたことである。ⅢC 期の追加により骨盤リンパ節転移や傍大動脈リンパ節転移の有無が治療に影響する可能性がある。われわれは、子宮頸癌患者における骨盤/傍大動脈リンパ節陽性の予後を評価した。

方法 オランダがん登録のデータを解析し、2005～2018 年に新たに I B-ⅣA 期と診断され、扁平上皮癌、腺癌、腺扁平上皮癌のいずれかの組織を対象とした。他の組織型や I B 期の症例は除外された。FIGO 2009 を用いてグループ 1：I B-ⅡA1 期を含む早期子宮頸癌、グループ 2：I B2-ⅡB 期、グループ 3：ⅢA-ⅢB 期、グループ 4：ⅣA 期に分類した。さらにそれぞれ FIGO 2018 に再分類してリンパ節転移を認めない群、臨床的/病理学的にリンパ転移と診断した群に分けて、3 年、5 年、15 年の全生存率を算出した。

結果 対象患者 6,082 人のうち、1,740 人 (29%) が骨盤および/または傍大動脈リンパ節転移を有していた。FIGO 2009 の I B-ⅡA1 期および I B2-ⅡA2-ⅡB 期で骨盤および/または傍大動脈リンパ節転

移がある症例では、全生存率が有意に低下しており、($p < 0.001$, $p = 0.009$)、5 年全生存率は 77% および 67%、リンパ節転移がない症例では 92% と 74% であった。FIGO 2009 の ⅢA-ⅢB-ⅣA 期については、リンパ節転移の有無にかかわらず、生存率に有意差はなかった ($p = 0.064$)。FIGO 2018 の ⅢC 期では、3 年全生存率、5 年全生存率、15 年全生存率はそれぞれ 72%、65%、59% であった。画像診断に基づいて診断された ⅢCr 期の生存率は、病理診断に基づいて診断された ⅢCp 期と比較して、有意に低下していた ($p < 0.001$)。

結論 FIGO 2009 における I B-ⅡB 期の子宮頸癌患者で、骨盤および/または大動脈傍リンパ節転移のある症例は、転移のない症例と比較して、生存率が有意に低下した。FIGO 2009 における ⅢA-ⅣA 期の生存率は、リンパ節転移の影響を受けなかった。

(弘前大学大学院医学研究科産科婦人科学講座

松村由紀子 抄)

肥満女性におけるプレコンセプションの生活習慣介入と子の心血管状態を示す心エコー検査の指標

Preconception lifestyle intervention in women with obesity and echocardiographic indices of cardiovascular health in their children.

den Harink T et al
Int J Obes 46:1262-1270, 2022

背景 妊娠前の母親のライフスタイルを改善することで、母親の肥満が子の将来の心血管疾患 (CVD) リスクに与える悪影響を防ぐことができる可能性がある。本研究では、肥満のある女性に妊娠前の生活習慣介入を行うことで、子の心血管系の健康状態を示す心エコー検査の指標が変化するかどうかを検討した。

方法 肥満で不妊症の女性に、不妊治療前に 6 カ月間の妊娠前生活習慣介入を行った場合、行わなかった場合と比較したランダム化比較試験を行い、24 カ月以内に妊娠した 341 人の子のうち、315 人がこの研究の対象となった。介入は体重減少 ($\geq 5\%$ または $BMI < 29 \text{ kg/m}^2$) とした。小児は盲検化され、1 人の小児心臓専門医によって実施された心エコー評価を受けた。

結果 最終的に 60 人の小児 (32 人の女兒, 53%) が研究対象となり、平均年齢は 6.5 ± 1.09 、24 人 (40%) が介入グループの母親から生まれた。介入グループの小

児は、心エコー検査で拡張末期心室中隔が薄く (-0.88 Z スコア, 95%CI: -1.18 — -0.58)、左室心筋重量係数が低く (-8.56 g/m^2 , 95%CI: -13.09 — -4.03)、左心室の収縮期および拡張早期の環状速度 (1.43 cm/s 95%CI: 0.65 — 2.20 , 2.39 cm/s 95%CI: 0.68 — 4.11) は、対照群の母親の小児と比較して高いことがわかった。

結論 妊娠前にライフスタイルの介入を受けた肥満女性の子どもは、心構造と機能が改善し、心室中隔が薄く、左室心筋重量係数、収縮期と拡張期の組織ドブラ速度が改善した。本研究は、妊娠前のライフスタイルへの介入が次世代の CVD リスクを低減する方法を提示する可能性を示唆する、ヒトでの初めての報告である。

(弘前大学大学院医学研究科産科婦人科学講座

大石舞香 抄)